

2021

3

令和3年3月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻331号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

とあそぼう



さわやか福祉財団

つながろう、心で 広げよう、笑顔の助け合い！

「地域助け合い基金」で

コロナ禍を乗り越えて共生社会へ

あなたの気持ちを
助け合いの力に
活かしませんか？

「寄付」と「活動」で
温かい地域づくりを進める基金です



こんなふうに役立っています！ 皆様のご寄付

コロナ禍での高齢者と 子どものつながり

子どもたちが
メッセージカードと
青汁を高齢者にお届け



埼玉県
三芳町

メッセージカード・高齢者への
プレゼント代等を助成

コロナ禍でもつながりを切らない工夫

市民センターの with
コロナメッセージボー
ドに住民がメッセージ
を貼りに行く活動

付箋・模造紙・
画用紙代等を助成



長野県
長野市

にここオレンジカフェいわくら【農園倶楽部】



京都府
京都市

認知症カフェ
→屋外の農園プロ
ジェクトで、活動
継続と参加住民の
多様化

畑の賃借料、
苗・農具購入等を助成

ご支援、ご寄付を
どうぞよろしくお願い申し上げます。

※詳細は、本文30ページをご参照ください。

財団ホームページ内
基金関連ページ



公益財団法人

さわやか福祉財団

さあ、言おう

2021年3月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道

地域づくりは自分づくり

清水 肇子

4 連載 厨房男子 聞き手・堀田 力

妻と一緒にやるのが当たり前 中根 敏雄さん

12 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

地域福祉会×自治会×老人会が結集し、 住民参加の生活支援を創出

おたがいさまネットみなみ（神奈川県南足柄市）

20 移住 悪くないですよ 第4回

人とつながり、遊ぶように生き、学ぶ

伊東 翼さん（富山県氷見市）

26 連載 2 老いの暮らしを創る 人貧乏 福祉ジャーナリスト 村田 幸子

28 「地域助け合い基金」 状況のご報告

31 応援ありがとうございます！「地域助け合い基金」助成先のご紹介

新しいふれあい社会づくりに向けて

- 新地域支援事業・
助け合いの地域づくり

36 北から南から 各地の動き

- その他の財団の活動 など

41 ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・ご寄付者の皆様のご紹介

43 NEWS & にゅーす

44 さわやか活動日記（抄）

①NEXT動画のご紹介／②『さあ、やろう』のご紹介／③「地域助け合い基金」ご寄付のご案内／④さわやか書棚／⑤『さあ、言おう』8月特別号のご紹介／⑥『さあ、言おう』バックナンバーのご紹介／⑦みんなの広場／投稿募集／⑧生活支援を目的とする市民後見NPOを増やそう！／⑨さわやかパートナー・『さあ、言おう』のご案内／表紙絵から

助け合いを広げよう！ 新・ひとりごと ● 大島 伸一

地域づくりは自分づくり

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

東日本大震災の発生から、この3月11日で丸10年が経とうとしている。死者・行方不明者は2万2000人を超え、ご遺体が発見されながらも身元が特定できずに、番号のまま永眠されている犠牲者の方もいる。突然の大災害の被害に遭われた皆様に、改めて哀悼の意を表しますとともに、これまでのご苦労に心からのお見舞いを申し上げます。

福島原発の事故により故郷を失ったままの方々を含め、まだまだ被災地では解決されていない問題が様々にある。この10年に国が投じた復興予算はおよそ32兆円という。うち約4割を占める額が防潮堤をはじめ住宅や道路建設のためのいわゆるハード面のインフラ整備だ。これにより暮らしやすくなった面もある一方、住宅整備が遅れ、移転先ではこれまでの近隣関係が途切れて孤立が深刻化し、生きる気力が損なわれていくといった問題も新たに多く指摘されている。お一人お一人にとっては、過去10年の話ではなく、変わらずに「今」の話であることを痛感する。莫大な税金をかけてなお、心の痛みを救えていない現実がある。

人のつながりがいかに重要か、そして心身に与える影響の大きさは、まさに今回のコロナ禍

で、日本全体のみならず世界中が体感せざるを得ない状況になった。地域づくりの一番の基礎もこのつながりづくりだが、なぜならそれは交流を通じて何よりもまず自分が元気をもらえらからだ。自ら日々の暮らしのこと、周りのことを考えながら、皆とつながる場を持ち、自分を地域の中で生かしていくことで、それぞれの自分づくりも進んでいく。

災害支援も平時の生活支援も、自分でどうにもならないことは皆で支援するという助け合いと、可能な状況になれば支援も受けつつ自らも積極的にできることは参加しようという助け合いがある。前者は「命」をつなぎ、後者は双方の「いきがい」をつむぐ。その両方を柔軟に可能にするのが助け合いの特性なのだと思う。

いきがいをつむぐ助け合いは、人と人とのつながりから始まる。よく地域づくりと私たちも言うが、単に行政が補助金を出して、方法を伝え、活動や場を立ち上げても、自分づくりの大切さが共有されていなければ、長続きしない。つながりができることが楽しい、助けてもらってありがたい、ありがとうと言ってもらえてうれしい、自分の中にそんな思いを持てることで、地域の中に次第に自分の居場所が見つかり、地域力も醸成されていく。今、地域づくりに関わっている行政関係者や生活支援コーディネーターも、また地域活動に関心を持とうと考えている皆さんも、地域と関わる自分づくりの大切さ、楽しさをぜひ重視してほしいと思う。

ジェンダー問題が大きく取り沙汰されているが、本来、個人差は、性別の差を超え、年齢差も、地域差すらも凌駕する。誰もが自分自身の思いを生かせる場としての地域づくりが、大震災10年からの教訓を生かす日本全体の課題である。

厨房男子

聞き手
堀田 力

連載

妻と一緒にやるのが当たり前

中根 敏雄さん

□ 愛される 中根さん

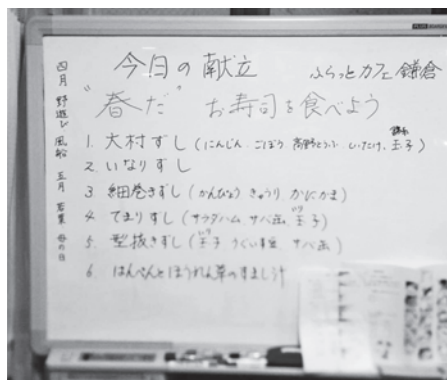
エネルギーあふれる助け合いのリーダー渡邊公子さんが2017年、鎌倉に開いた子ども食堂。名を「ふらっとカフェ鎌倉」というが、場所固定されていない。定休日にお店を貸してくれるレストランやカフェ、海の家や特養などを巡回しながら、おおかた週に一回、夕食時にオープンする。

活動を支援する農家や魚屋さん、食料品店などから届くその日の食材を見て、渡邊さんのリ

ードで6、
7種のメニューが決まる。

ご近所のお母さん方を中心とする10人ほどの調理ボランティアが、ワイワイガガヤ、分担してメニューに挑む。その中で、いやでも目を引くのが本編の主人公、中根敏雄さん、86歳。





2018年3月の鎌倉静養館でのメニューは春満載



お寿司に入れるゴボウのさがきを手際よく行う中根さん

取材者と同学年ながらヨタヘロの気配はまるでなく、おしゃれなエプロンにおしゃれなバンダナの三角巾。本人は「楽しんでいるお母さん方の邪魔にならないよう、ジャガイモの皮むきとか、下ごしらえに徹している」と言うが、難しいゴボウのさがきがきを軽やかにこなし、隣ですりこぎを使う小学生の女の子のすり鉢をさりげなく押さえて手伝う等、まさに頼りにされる大先輩の風格十分。お母さん方も、「この味付け

で大丈夫？」と中根さんの判断を求めている。「いやあ、楽しくてたまらないですよ」と中根さんの笑顔が爆発する。

「子どもたちが夢中で食べてから、『おいしかったよ』と素直に言ってくれた時。一緒に食べるお母さん方とのどうってことのないお話。私は人が大好きだから、どんな話でも人の話は聞いて楽しい。お母さん方はみんな頑張ってるし、こういう活動を実践される渡邊さんて、ほ

んとすごい
など、ただ
だ尊敬する
ばかりです」
中根さんの
人を褒める
言葉には直
情がこもっ
ていて、そ
その熱い心
がそのまま



らに伝わってくる。中根さんて、この活動をしていて本当に幸せなんだな、と実感する。

しかし、戦前戦中、男子厨房に入らずの時代に育った中根さんが、どうして調理をするようになったのだろう。

□ 人が好きな愛妻家

中根さんは7人きょうだいの下から2番目。

4歳で父を亡くし、ほかのきょうだいも長生きした人はなく、父を含め、全員肺結核に命を奪われた。女手一つで中根さんたちを育てた母は、戦時中の空襲で横浜の家を失い、横須賀から逗子へと住まいを移しながら、中根さんが70代に入るまで長生きされた。

「ずっと母とは近くで暮らしてました」と語る中根さんからは、中根さんとお母さんの密着ぶりの匂いがただよってくる。たっぷり愛情が注がれて育ったことが、86歳になっても何となく人なつっこさがこぼれる人間的魅力を創り出し

たのであろう。

大学を出た中根さんは、渋谷にある出版社に勤務し、60歳で定年退職するまでパソコンの説明書の編集、翻訳など、取材と編集の仕事に従事した。

「戦後の復興期から高度成長に移っていく時代によく銀行のトップを取材しましたがね、みんなすごい鼻息だったですね」。中根さんは日本の成長のど真ん中にいる人たちに触れて、その人柄と心意気とを取材してきた人なのである。それは刺激的な人間観察であったと思われるし、ますます人の話を聞くのが楽しくなったのだらう。

* * *

しかし、中根さんの人生を決め、その幸せを創り出したのは、25歳で結婚した綾子さんであった。

綾子さんは、中根さんが大学生時代アルバイトをしていた横浜にある三菱系の造船所で、看

護師として働いていた。

彼女に惚れ込んだ中根さんは、大学を卒業して勤務先が決まると命がけでアタック、ついに結婚に成功して、2女1男を得た。綾子さんは勤務先を造船所から鎌倉市役所に変えたものの、看護師として定年まで働き続けた。時に夜間勤務もある。子育てもある。記者、編集者として多忙な中根さんも、愛妻綾子さんに家事、子育てを委ねきりにすることはできない。

「綾子が頑張っているのを知らん顔をしていることなどとてもできません。私は自然に家事と一緒にやるようになりましたし、調理も子ども頃から手先は器用な方でしたから、ごく自然に皮むきなどをやるようになりましたね。じつとしてるのが嫌いなこともあり、綾子と一緒にやっているのが楽しくなって、ついに東京の老舗の刃物屋まで行って自分専用の包丁を買いました。その時の包丁を、今でも愛用していますよ」

中根さんの調理は妻への愛から始まったという話だが、無理はなかったのだろうか。

小学校の校長先生をしておられる長女の大塚潤子さんに当時のお父さんの家事の様子などを聞いてみると、

「もう私が物心ついた頃から父と母が料理しているのはごく当たり前のことでした。父が母を手伝っているというのではなく、一緒にやっているという感じでしたね」ということであった。

戦前戦中に育った男子であっても、調理や家事、子育てをするのに特別な理由などいらない。それは人として当たり前のことであり、夫婦ともに働いているのであれば、同じように分担したり一緒にやったりするのは普通のことなのである。ただ、もはや根拠のない男子厨房に入らずの亡霊が今になってもただよい続けている中、それを無視して心の赴くままに調理や家事をやった中根さんは、いい生き方をされたとうらやましくも尊くも思える。「当たり前でしょ」と

いうその視線がまぶしかった。

■ 家庭を築き、自分を伸ばす

男は働き、女は家庭を守るのが生き方の標準モデルであった高度成長期のモーレッツサラリーマン中根さんが、標準的サラリーマンと違うのは、自分も中に入って家庭を築いたことと、仕事以外に自分の能力を存分に伸ばす地域の場をたくさんつくったことであろう。

家庭にも地域にも自分を活かす場がなく、いきがい失って所在なげな多くのモーレッツサラリーマンの成れの果ての中で、中根さんがいきいきと光っている理由は、そこにある。

潤子さんは、子どもの頃を思い出しながら、言う。「父や母の手料理でね、家族みんな大好きなことをしゃべりながら食事をするのは、ほんとに楽しかったですね」

「父はペン習字も教えてくれたし、原爆展にも連れて行ってくれました」。戦争のむごい体験

や飢餓の体験が身に染みている私たちの世代の中根さんは、その社会体験もしっかり次の世代に引き継いでくれているのである。

「私の大学時代には、父と一緒に料理教室に習いに行きました」

中根さんは、家庭で調理をやっているのに、しかも、まだ働いている時だったというのに、さらに調理の腕を磨こうとしたのだ。大学生のお嬢さん連れの受講生って、さぞかし目立ったであろうに。

このように強い家族の絆の真ん中にいた中根さんは、いま一人暮らしをしながらも、それぞれ別に家庭を持っている子どもたちとの絆の真ん中において、それが大きな安心のベースになっている。家族が集まっても話の輪に入れない旧モーレッツサラリーマンとは違う。

* * *

もう一つは、中根さんの能力を活かす地域の場の多彩さである。

60歳で出版社を退職した中根さんの知識欲と好奇心は、一挙に花開いた。

活躍の場は地元鎌倉市で、主たる場は鎌倉市教養センターであったが、中根さんはバイクに乗ってどこへでも身軽に出かけた。

はじめは好きな美術史から学び始め、芥川龍之介など近・現代の作家から源氏物語などの古典と学んだ。そこから語りへと進んで、落語も語れるようになった。

絵は水彩画から入って、アートの心を自由に羽ばたかせるため、フリーアートの会をつくり、油絵、写真、彫刻など、鎌倉に住むいろいろな分野のアーティストに呼びかけて、年に2度展示会を開くところまで伸びてきている。「何かが上手な人に出会えるって、心がウキウキしますよ」

もちろん、調理の腕も広げている。和菓子も学んだし、スペイン料理も学んだ。なんと裁縫の腕も上げていて、絵柄を含めた手造りのTシ

ヤツやバッグを作り、趣味を広げた。

ボランティアの世界には、いろいろな能力を持ったいきいき人間がいるが、私もさすがにこれだけ幅広く挑戦してきた人には会ったことがない。しかも、どれもただ学習するだけでなく、直接間接誰かのためにその能力を活かしているのである。

■ 虚しさを癒すつどいの力

人間力全開で退職後の人生を開花させている中根さんを、最大の悲劇が襲った。

時に中根さん79歳、愛し続け、支え合ってきた綾子さんが病を得て亡くなったのである。

中根さんは生きる力を失い、子どもたちもその心の穴を埋めることはできなかった。

「さみしかったです」。明るい表情で自分を語っていた中根さんの全身から、果てしなく奥深いさみしさが伝わってきた。7年を経て癒されない虚しさを心の底に秘めているのだから、当



さりげなく、優しく子どもの料理をサポート中

時はどれほど辛かったことであろう。

それはもちろん周りの仲間にも伝わったのであろう、鎌倉市教養セ

ンターで知り合った仲間の一人、渡邊公子さんが見かねて声をかけてくれた。

「よかったらうちでやっている子ども食堂に来ない？」

それは、17年に開いたふらっとカフェ鎌倉の前身になる子ども食堂だったが、ここに顔を出すようになって中根さんの心は少しずつ癒されていった。はじめはただ顔を出すだけだったが、子どもたちの喜ぶ様子を見るうち、自分も調理を手伝いたくなった。

手伝い始めればもともと腕のある中根さんで

ある、ボランティアのお母さん方に感謝され、打ち解けると、その集まりが中根さんを救ってくれた。そこで沈んだ心にあたたかいエネルギーが注ぎ込まれ、やがて中根さんの向学心や好奇心がよみがえり、いまやほぼ元の全開状態に戻っている。綾子さんへの愛が呼び起こした調理好きが、綾子さんが亡くなった後、再び中根さんに生きる力を呼び戻してくれたのである。

潤子さんが言った。

「うちの息子はね、いまでも『おじいちゃんのポテトサラダが食べたいから、おじいちゃんのところへ行こう』って言うんですよ」

ポテトサラダの味で孫が呼べる86歳のおじいちゃんって、現代のヒーローだと思いませんか。

（編集部後記） 中根さんの調理中の姿や、「人

が好き」という声と笑顔は、さわやか福祉財団の動画「NEXT♡心と心をつなぐ工夫と取り組み」でご覧いただけます。

大好評

動画『NEXT ~心と心をつなぐ工夫と取り組み~』 ご活用ください！

コロナ禍にあっても、アイデアと工夫でみんなが笑顔になれる活動を紹介している当財団制作の動画「NEXT 心と心をつなぐ工夫と取り組み」（各8分程度）。皆様から大変ご好評いただいています。コロナの時代における助け合い活動のヒントとして、生活支援コーディネーターの勉強会のツールなどとして、ぜひご活用ください！

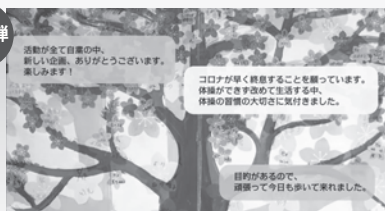
NEXT

心と心をつなぐ工夫と取り組み



第1弾

奈良県生駒市



あなたの「元気」を届けよう
プロジェクト

第2弾

静岡県袋井市



出前居場所・青空居場所・
我が家のごはん届けます

第3弾

大阪府門真市



こんな時こそ地域の力で、
ゆめ伴プロジェクト

第4弾

新潟県新潟市



受け身にせず
「みんなで守ること」で活動再開

第5弾

岡山県倉敷市



つながる回覧・
マスクプロジェクト

第6弾

神奈川県鎌倉市



食を通じた居場所（みんなべ）・
フードパントリー

動画は、当財団ホームページでご覧いただけます。

<https://www.sawayakazaidan.or.jp/movie-next/>



地域福祉会×自治会×老人会が結集し、 住民参加の生活支援を創出

おたがいさまネットみなみ（神奈川県南足柄市）

各地で進む助け合いの地域づくり。南足柄市では一昨年、南足柄地区の住民有志による助け合いの組織「おたがいさまネットみなみ」が発足しました。身近な「防災」を切り口として、地域の団体の枠組みを越えた新しいチカラを結集。住民の声をしっかりと聞いて反映させ、説明会や必要な研修も行うなど、丁寧なプロセスを踏んで活動体制を整備したことで多くの賛同者を得て船出、地域に温かな支援の輪が広がっています。

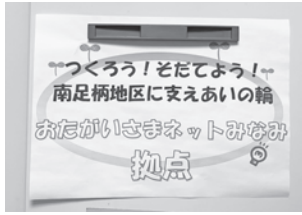
（取材・文／城石 眞紀子）

地域福祉会を軸に 活動の土台づくりに着手

神奈川県西部に位置し、金太郎伝

説ゆかりの地として知られる南足柄市。人口は約4万2000人で高齢化率は32・1%。南足柄地区、北足柄地区、岡本地区、福沢地区の4地区から成るが、「おたがいさまネットみなみ（ネットみなみ）」は、このうち南足柄地区で取り組まれている有償ボランティアによる生活支援活動だ。

主要メンバーの皆さん。
手前右から時計回りに、
市社協平川さん、田中沙
里さん、ネットみなみ副
会長市川さん、会長永田
さん、会計加藤さん



南足柄市ではネットみなみに先行し
て、市内のおよそ半数の人口を占める
岡本地区で、2017年4月から「お
たがいさまネットおかもと（ネットお
かもと）」がスタート。その活動が広
まる中で、南足柄地区の住民から「こ
ちらの地区ではいつ始まるのか」「こ

うした取り組みが必要」という声があ
がった。それを受けて同市社会福祉協
議会では、南足柄地区の地域福祉会
（自治会エリアを単位とした住民主体
の地域福祉の推進組織）の代表者会議
で、生活支援活動の創出についての検
討をはかった。その狙いについて、市

社協事業班班長の平川恵
理子さんは次のように話
す。

「ネットおかもと立ち上
げの際、私たちも準備委
員会に参加して、地域の
中でなかなか協力が得ら
れず苦勞されたのを見て
きました。そこで、南足
柄地区で活動を立ち上げ
るのであれば、日頃から
各地域で福祉活動を行っ
てくださっている地域福
祉会の方々が軸になって

進めていくのがスムーズではないかと
思い、お話しさせていただきました」

地域福祉会代表者会議では、これま
で生活支援活動について議題に上った
ことはなく、当初は戸惑いもあったと
いう。しかし、「助け合いの仕組みが
あることは地域の財産になる」との意
見も出て、「うちの地区でもやってみ
よう」と全会一致で意思決定がなされ
た。

「ただ、地域福祉会だけで担うのは難
しいというお話もありました。そこで、
自治会や老人会の皆さん、民生委員さ
んにも声をかけて、みんなを巻き込ん
でやるにはどうしたらいいか、地域団
体の連携に向けて結集の方法を探るこ
とになりました」

地域の多様な団体が連携して 準備委員会を発足

そこで計画されたのが、生活支援に



ついて知ってもらいた
めの研修会の開催だ。

「何かあったときに、
助け合えるのは隣近所
です。とつきやすい

。防災を切り口とし
て、参加を呼びかける
チラシを作成。地域福
祉会のメンバーから、
自治会長や老人会会長、
民生委員など、協力し
てくれそうな人たちに
チラシを渡して声かけ
をしたところ、『防

災？ それなら行って
みようか』と多くの人
が反応してくれまし
た」と話すのは、中心
となって動いた地域福
祉会会長で、ネットみ
なみ会長も務める永田

米昭さん。

「直接話をすると、『老人会は手伝う
ほうではなく利用する側だから、担い
手としては難しい』という声もありま
した。でも、中には協力してくださる
方もいたし、市老人クラブ会長の樋口
恆作さんはこうした活動に理解があり、
ネットおかもとのときから後押しをし
てくれていました。そうしたことから、
老人クラブの担い手養成資金を活用し
て立ち上げてほしいとの申し出もいた
だき、それを充てることで研修会が開
催できる運びになりました」（平川さ
ん）

同時に、地域で支え合うイメージを
持つてもらうと、南足柄地区11地域
が手を取り合ったキャラクターも作成。
18年2月の第1回研修会では、防災を
切り口に地域の枠組みを越えて活動す
る逗子市山の根自治会の実践例を学び、
その後の交流会では地域の課題と今後

の連携についての話し合いが持たれた。
さらに同年6月には、「助け合い活動
をどう広げるか」をテーマに当財団の
丹直秀理事が登壇し、第2弾の研修会
を開催。終了後には参加者に記名式の
アンケート調査を実施し、「今後、助
け合い活動を活発にするための話し合
いに参加できる」と賛同した人を中心
に声かけをして、準備委員14名を選出。
同年9月に「南足柄地区生活支援活動
準備委員会」を発足させた。

メンバーには地域福祉会のほか、自
治会長や地区老人クラブ会長、民生委
員など地域で活動する多様な人材が登
用され、ここに、新しいチカラが結
集。狩野自治会会長で現ネットみなみ
副会長の市川靖典さんは、「自治会長
をやっている地域に対する思いはあっ
ても、どうすればいいのかわからなか
った。それが研修会に参加したこと、
こういうやり方があるんだと、実現に

向けた道筋が見えてきた」と言い、福泉自治会会長で同会計の加藤晴彦さんは、「個人的に福祉には関心があり、必要なことだと思ったので一緒にやってきた」と賛同した理由について話してくれた。

アンケート調査や説明会など 周到な準備で活動体制を整備

その後、準備委員会では先駆者のネットおかもとの立ち上げメンバーにオブザーバーになってもらい、1年間かけて14回の会議を開き検討を重ねた。

まず、「生活支援活動とは何か」ということの周知とニーズ把握を目的に、自治会ごとに全世帯にアンケートを配布。調査項目には、①回答者の年代と性別、②お手伝いをお願いしたいこと、お手伝いできること、③お手伝いをお願いしたい方、活動に協力してもよい方、の3つを設け、自治会加入世帯に

は自治会から組
長経由で配布。

自治会未加入世帯には民生委員や地域福祉会等が配布すること
で配布率は100%。さらに49%という高い回収率を得ることができた。

その結果を踏まえて、住民向けの生活支援活

動説明会を自治会ごとに開催。地区の準備委員が内容を説明して支援活動者を募ったところ、125名がサポーターとして登録。11の地区ごとに調整役のコーディネーターも1〜4名選出して計21名となった。そして、顔合わせも兼ねた「コーディネーター・サポー



90名が集まった「コーディネーター・サポーター研修会」



お揃いのベストで臨んだ発足式

ター研修会」で活動の流れを確認し、19年10月1日の発足式を迎えた。

この一連の準備期間について聞いたところ、「途中、議論をする中で心配が先立ち、マイナスの方向に行ってしまうこともあった。そんなときにネットおかもとの方から、『心配ばかりし

ていても仕方ない。やってみてうまくいかないことがあったら随時修正していけばいい」とアドバイスをいただきたい。そこからスムーズに進んでいくようになった」（市川さん）、「自治会ごととの各地区で説明会を行ったことで住民の皆さんも参加しやすく、また顔の見える関係性が築けた。それが、多くのサポーターに登録してもらえるところにつながった」（永田さん）、「アンケートの回収については、自治会に入っている人に対しては、組長さんが配布だけでなく回収も担ってくれたので回収率が上がった。そこはよかった点だと思う」（加藤さん）と、それぞれが振り返った。

市全域に生活支援活動を 広げていきたい

活動の拠点を市の福祉施設「りんどう会館」内に置き、現在はサポーター

160名、コーディネーター25名が活動。一人暮らしの高齢者や障がいのある人たちの困りごとである、日々のごみ出し、草むしり、掃除、買い物などの支援を行っている。その実績数は、20年9月までの1年間で322件に上

活動の様子
(左・掃除、
下・ごみ出し)



る。

「生活支援活動も2年目に入り、コロナ禍にあっても、皆様に支えられて支援の輪が広がりつつあります。感染が怖いという心配から依頼を控えている、という話も耳にしますが、事前にコーディネーターがご自宅に訪問して依頼内容を確認するとともに、感染予防も考慮して実施の可否を判断。安心して利用できるよう、細心の注意を払って活動しています」（永田さん）

活動周知のために、パンフレットや広報誌の配布を継続して行い、自治会単位で「サポーターのつどい」を開いて意見交換の場を設け、顔の見える関係づくりや意見の吸い上げに取り組むなどの工夫も。また、活動は基本的には地区ごとに行っているが、登録しているサポーターで対応しきれない場合は、近隣地区のサポーターに支援を頼むなどの連携もしている。さらに、相

談内容によってはシルバー人材センターなど適切な機関を紹介したり、ネットおかもとと共催で市内介護事業所との意見交換会も実施するなど、地域の各団体とも協働してさまざまな知恵と工夫を重ね、活動が進化している。

今後については、「コロナ禍であるが故に、お困りのことも多いと思う。

頼みづらいとか、ご近所の手前恥ずかしいということもあるかもしれないが、どうしたらもっと気軽に活用してもらえるのかを考えたい。広報誌などを通じて、利用者の声などを伝えていくことも大事なのかなと」（市川さん）、

「コーディネーターの中には民生委員を兼ねている人もいますので、地域をまわりながら住民の声や要望を拾ってき、それが支援につながることもある。その民生委員の機能と我々の活動がリンクすることで、より細かな対応をしていければと思っている」（加藤さ



交流を深める「サポーターのつどい」

ん）などの課題も挙げた上で、「とにかく、住民の皆さんに喜ばれていることが励み。より使いやすい活動にしていきたい」と、お三方は抱負を語る。そこには、「これから先、地域にとつて必要な大切な仕組みだから」という

確固たる思いがあるようだ。

「市社協としては、まだ活動が立ち上がっていない地区の住民さんから生活支援を利用したいとの声もあるので、他地区にも活動を広げていきたいという思いがあります。ただ、コロナ禍にぶつかってしまい、地区でまとまって新しい動きを創り出すのが当面は難しいという現状もあります。そんな中、ネットみなみの皆さんが今、他地区の活動にも協力していこうという姿勢を見せてくださっています。その結果、地区は違うけれども、福沢地区の中の自治会の一つが、ネットみなみの一員という形で新たに仲間入りすることになりました。時間はかかるかもしれませんが、残る2地区全体にもこうした仕組みを広げていけるよう、引き続き活動立ち上げに向けて働きかけていきたい」（平川さん）

今後の進展にも、ぜひ期待をしたい。

● 南足柄地区を支援した丹直秀理事の話 ●

2018年6月の南足柄地区の研修会で、「支え合いの輪をどう広げるか」をテーマに講演しました。介護保険制度改正や2025年問題など国の方向性をお伝えするとともにグループワークを行い、当財団が制作した「新・助け合い体験ゲーム」を使って助け合い活動とはどんなものなのかを体験していただきました。

同地区における地域づくりの特徴には、注目ポイントが3つあります。

1つ目は住民力。15年に始まった総合事業ですが、行政主導で仕組みをつくったところでは、住民は自分たちが参加する活動だということがなかなか浸透しない地域もあります。その点、同地区では地域の特性を生かしながら、住民に助け合いの大切さを理解してもらった上で活動を創出、しかも、岡本地区から始まった取り組みを参考にネットみなみが立ち上がりました。

2つ目は、市社協が立ち上げの力になってくれたことです。初動の際の推進役を買って出てくださったことで、総合事業の狙いである「要支援程度の人であればお互いさまで支え合える地域をつくる」という方向性が明確になり、中身の濃い研修会もできました。

3つ目は、老人クラブの人材と資金がネットワークを通じて地域の支え合いに生かされたことです。全国老人クラブ連合会では、「これからは支えられるだけでなく、地域を支える役割を担おう」と発信しており、老人クラブを活用した先駆例にもなります。

総合事業の取り組みが遅れている地域もまだまだありますので、活動創出事例として、ぜひ参考にいただければと思います。

おたがいさまネットみなみ

南足柄地区に暮らす住民の有志が立ち上げた、住民同士の助け合い組織。「つくろう！そだてよう！ 南足柄地区にささえあいの輪」をモットーに、生活の中の困りごとや不安なことを解決する暮らしのサポーターとして活動している。対象者は南足柄地区に居住し、本人及び家族が高齢、体が不自由、病気、出産、育児などの理由により日常生活にお困りの方。利用内容は①日常支援活動（電球交換、家具の移動、掃除、洗濯、買い物、食事作り、草むしりなど）、②ふれあい活動（話し相手、囲碁将棋の相手、外出の付き添いなど）、③ゴミ出し。利用料金は①②は1時間1人400円、③は1回100円。

●連絡先／〒250-0105 神奈川県南足柄市関本403番地2 りんどう会館内
電話 0465-72-2299（南足柄市社会福祉協議会ボランティアセンター）

助け合いの仕組みづくりをさらに進めよう

情報紙

『さあ、やろう』 vol.15発行!

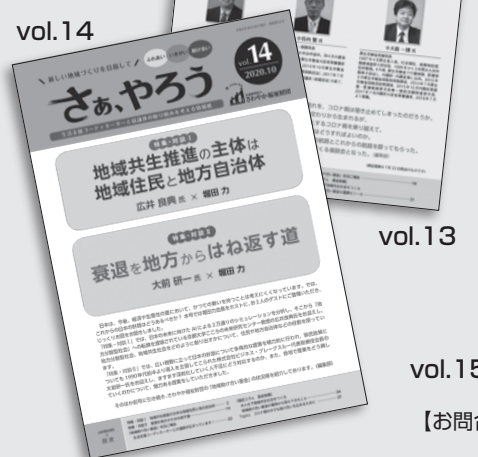
生活支援コーディネーターと協議体の取り組みを考える情報紙『さあ、やろう』。新地域支援事業に携わり、地域における助け合いの仕組みづくりを進めている方々の参考となる記事を掲載し、全国の関係者の皆さんに頒布しています。また、財団ホームページからもダウンロードできます。

ぜひ活用ください。

【vol.15目次】

- *特集・対談 共感から信頼し合う人間関係へ～地域共同体の再生～
- *「いきがい・助け合いサミット in 神奈川」ご案内
- *特集・鼎談 2040年の地域生活を支えるために、いま、何をなすべきか
- *緊急提言特集
- *動画『NEXT～心と心をつなぐ工夫と取り組み～』
- *「地域助け合い基金」状況ご報告
- *Topics コロナ禍の中でも助け合いを広めるために

vol.14



vol.13



vol.15

【お問合せ】電話 (03) 5470-7751

メール post@sawayakazaidan.or.jp

移住

悪くないですよ

第4回

いつかは地方へ

伊東翼さんは、1983年に東京で生まれました。それ以降、ずっと東京で育ってきたが、母親の実家がある氷見市をよく訪れていた。

「感受性の強い子ども時代に、少しですが田舎暮らしを体験したことがずっと心のどこに残って

人とつながり、 遊ぶように生き、学ぶ

伊東 翼さん（富山県氷見市）

2013年から富山県氷見市の職員として勤務し、氷見の未来に向けた取り組みを続けている伊東翼さん（37歳）。東京に生まれ育ち、大学も就職も東京だった伊東さんが、子どもの頃から心のどこかに持ち続けた田舎暮らしへの思い——。幼少時からゆかりの地・氷見でそれを実現した今、どのような生活を送っているのか聞きました。（取材・文／塩瀬 潔泉）

いました」

もともと虫が大好きだった伊東さんは、訪れた田舎ではもちろん、自宅近くの公園などでも虫取りに夢中になったが、子どもながらに都会でも地方でも虫が年々少なくなってきたと感じていた。

大学進学を考える時期になり、「いつか地方に行きたい」という漠然とした思いを抱きつつ、自分

● 氷見市

に自信が持てる何かを身に付けようと思いながら、大学卒業後は交通インフラ系の企業に就職し、経理を担当した。仕事の傍ら、地方での生活につながる何かを、といういろいろな切り口で模索を続け、社会人2年目に出合ったのが「パーマカルチャー」だった。パーマカルチャーとは、パーマネント（永続性）、アグリカルチャー（農業）、カルチャー（文化）を組み合わせた造語。パーマカルチャー・センター・ジャパンが提唱する「永続可能な農業を基に、人と自然が共に豊かになるような関係を築いていくためのデザイン手法」のことで、神奈川県相模原市の藤野町で社会人を対象に月1回、土日に泊まり込みで農業や建築を学ぶ講座が行われている。古民家に1期20〜30人が1年間一緒に宿泊しながら、持続可能な農業や、必要な物をデザインし創り上げる。ここで仲間と協力し、地元講師の人たちの協力を得ながら、伊東さんも農業の基礎を学び、課題として出された野菜の苗を栽培する温室の建設を経験した。全くの素人である受講生が、身近な材料を使って試行錯誤しながら、

がら、どうすれば日光を取り入れたり、断熱・蓄熱効果の高い建物になるかなどを考えて、1年後に温室を完成させた。



伊東さん一家（2016年頃）

伊東さんと妻の葉子さんはここで知り合った。葉子さんはもともと長野県で臨床検査技師の仕事をしていたが、「本当はどう生きたいのか」というテーマを自分の中に持ち続けていた。働きながらアロマセラピーや哲学、環境問題を学べるスクールに通う中で気づきを得て、アロマサロンに転職するとともにパーマカルチャーに参加したという。2人は価値観を共有して11年に結婚。ほぼ同時期に伊東さんの大阪への転勤が決まり、2人で転居した。

大阪に行ってから具体的な移住を検討するよ

うになり、葉子さんの出身地・長野や、伊東さんの原体験の地・氷見が候補に挙がった。そして、大阪で1年が経った頃、伊東さんは氷見市役所の職員募集の情報を見つけた。

「昔から大好きだった氷見に行つて地元で貢献できる仕事でしたから、これは応募するしかないと思いました」

大阪ではリラクゼーションサロンに勤めていた葉子さんもこれに賛成し、伊東さんは採用試験に見事合格。翌年春から市職員として勤務することが決まった。葉子さんは氷見に移住後、子育てと並行して着々と準備を進め、アロマの個人サロンを起業した（コロナにより現在休業中）。

氷見へ移住 幼少期の思い出の地へ

氷見で最初に住んだ家は、市街地に近い築40年ほどの空き家。引っ越し前から有給休暇や週末を利用して2人で現地に通りリフォームした。材料の調達からすべて自分たちでやるのは、手間暇がかかり大変な作業だが、知識や技術、思い出など

得られるものがたくさんあり、何より楽しかった。4月の市役

所入庁まで約半年間、何日か続けて現地に滞在し、北陸の冬を体験できたのもよかったという。

氷見に移住してからは長女の佳矢乃ちゃん（現在6歳）が生まれ、最初の家から引っ越した今の住居はほかでもない、伊東さんが幼い頃に訪れては虫を追いかけた、祖母と叔父夫婦が住む集落である。標高200メートルほどの市内の一番山奥にあり、家の前からの眺めは田んぼと里山、そのすぐ向こうに海が広がる。「山と海がとても近くて、夏は気軽に海に行けます」

大人になって祖母の近くに移住するという「おばあちゃん孝行」をした伊東さん一家。おばあちゃんはもちろん大喜びで、ひ孫の佳矢乃ちゃんに



リフォームの様子

は大甘だ。自分で育て収穫した野菜を伊東さん一家に届けることが「生きがいだ」と言っており、叔父さんも釣りが趣味なので、たくさん釣れたときはお裾分けをもらうこともある。また、ご近所さんから収穫した野菜などをいただくことも多い。「ありがたいです。もちろん私たちがもうれしいし、分けてくださる方々もそれが張り合いになっているんですね。ただ、何かもらうといつか何かの形でお返しを、という気持ちになります。そしてお返しするなら、できれば買った物より作った物で。そうして集落の人たちとの関係が深まっていった気がします」

普段の食料や日用品は車で週1〜2回、市街地まで買い物に行くが、物価が特に高いと感じることは少ない。



集落の景色と、伊東さんのおばあさま

とはない。また、伊東さんの家では近くにある木や廃材を燃料にして薪ストーブと薪ボイラーを使っている。暖房費などはほとんどかからない。そして、伊東さんは氷見に来てしばらく市役所で林業を担当したこともあり、地元山林整備の手伝いや竹林伐採等に参加していたが、現在は集落自治会の副会長をしている。かねてより、高齢化と過疎化で集落の行事等を維持するのが難しくなっていたが、コロナ禍で運営が一層厳しくなってきた。

「皆さん、集まって今後のことをじっくり話し合いたいだろうと思います。それができないこの時期、せめて班長会で住民の声を共有できるように、思いの丈を紙に書いて提出してもらおうなど試行錯誤しています」

これまで代々伝統を守ってきたという思い入れから、「まだまだやれる」という声もある中、伊東さんにはあと5年10年したらどうなのか……という心配があり、外から来た人間の客観的な目も必要かもしれないと考えている。



市職員として考える氷見の未来

市役所での伊東さんは、市民課や農林畜産課林業担当等を経て、現在は「花みどり推進室」に所属。氷見市では、海浜植物園の老朽化と来園者数の伸び悩みから、園のリニューアルに林野庁が推進する「木育」を取り入れることになった。伊東さんは農林畜産課所属だった頃からこの事業の立ち上げを担当し、氷見市独自の木育を進めてきた。毎月市内で誕生する赤ちゃんに、氷見の木で作ったおもちゃを「初めてのおもちゃ」として誕生祝いにプレゼントする取り組みや、木工作家によるワークショップ等を企画。庁内の関係部署との連携や、市内のママさんグループの知恵を借りるなどしながら事業を拡充。スタートだけでなく、定着することを目標に進めてきたこの事業も、この3月の園リニューアルと同時に完了する。

そして、伊東さんが住む論田地区と隣の熊無地区は、今年春から富山県の移住者受け入れモデル地域になることが決まった。伊東さんはその準備

を担当し、県や移住センター、関係団体等と連携するほか、昨年から首都圏の大学の学生と一緒に農産品の6次産業化（農山漁村の地域資源を活用し、新たな付加価値を生み出そうとする取り組み）等に動いている。移住者であり市職員である伊東さんの役割が期待される。

「『自然が美しくて、人が良くて』という中山間地は日本各地にあります。美しい自然ほど便利さからは遠く、人間が生きるには厳しい場所。単に人を増やせばいいということではなく、どのくらいの人でどんな暮らしをすれば自然と共存していけるのか、幸せな地域つてどんなものなのか、という問いが常に自分の中にあります。答えはまだ出ませんが、日々の暮らしを大事にしながら模索しています」

● 生きることは大変なこと だからこそ喜びがある

今でも、出張などで時に東京を訪れる伊東さん。都会に行って感じるのは空気の重さ、そして「攻撃性」だという。



伊東さんの現在の自宅。
室内には薪ストーブが

「消費を目的とした広告などは人の欲求に訴えかけるものなので、“攻められてる感じ”がすごい（笑）。かつては自分もこの中にいたんだなあ、と思いますね」

消費するのは簡単、作ったり維持したりするのは難しくとも手がかかること。集落の人々は、作物を収穫したり加工品を作るために、いつも何か月先、何年先を見据えて動いている。住居を維持するために、細かな修繕を丁寧に行う。先を見て、知恵を絞り生活している。

「そういう暮らし方を見て、生きるのって本来すごく大変なことなんだ、スイッチを押せば手に入

るものじゃないんだ、と。でもだからこそ、作る過程で知識や技術、人とのつながりを得られる喜びがあり、そこにいきいきとした時間があるんじゃないかと思います。子どもをそういう環境に置いてやれたのもよかった」

この4月から佳矢乃ちゃんは小学1年生。多忙な伊東さんに「隙あらば飛びかかってくる（笑）」という活発な子に育っている。

「石ころ、葉っぱ、雪……何でも遊び道具に変えてしまう子どもの発想力や想像力には驚かされます。ここでの子育てを通して、私たち大人も遊ぶように生きて、遊びの中からたくさんのことを学んでいければ」

自宅では、朝起きて薪ストーブの火をおこし、夜になってその火が自然と燃え尽きるのを見て、1日の始まりと終わりをかみしめる。幸せを実感し、安らぐ時だ。「こんな贅沢、ほかにはないです」と伊東さんは満ち足りた表情を見せた。ふるさと・氷見のために、住民としても市職員としても、今後ますます活躍されるだろう。

人貧乏

福祉ジャーナリスト 村田 幸子

高齢者のひとり暮らしは、男女とも増える一方です。私も、その仲間。加えて夫婦だけで暮らす高齢者はおひとりさま予備軍なわけですから、超高齢社会はおひとりさま社会でもあります。ひとりは気楽でいいとメールやラインを駆使し、活動的に暮らしている人が増えてきた一方で、ふと自分の周りを見回してみるとの出来る友はいない。気の置けない友がほしいという切実な願いを抱く人も、多くみられます。自分のことを気にかけてくれる人が

いない、自分が気にかけている人もいないという状況は、寂しすぎます。高齢期に一番つらいのは「人貧乏」ではないでしょうか。高齢者の閉じこもりは社会問題となっています。そんな現実を前に、行政はさまざまなイベントを企画したり、民間の人たちによる出会いの場づくりなども行われ、高齢期における新たな人間関係をつくる試みは活発です。「友活」（友だちづくり）なる言葉も生まれました。「友活」によって、自分と気の合う友や仲間巡り合えるかもしれませんし、人



とのつながりが豊富になれば、さまざまな情報が入ってきて暮らしは膨らみます。しかし一方で友活には、困った時には助けてもらいたいから、という気持ちが強く働いているのではないかと感じます。何かやってくれると期待するだけでは相手は負担に感じ、引いてしまいます。

人によって友との関わり合いはさまざま。存在意義も違います。友の多さに心安らぐ人もいるでしょうが、私はしみじみと話ができる人が数人いれば満足です。どんなにいいや議論をしても、最後は分かり合えると確信できる友は、そうはたくさんいません。私が人生における友との関わりについて考えるようになったのは、40歳を過ぎた頃だったと思います。

赤電話 友は何人いてもよい

関西で活躍している川柳作家、森中恵美子

さんの句です。赤電話は廃止され手書きのアドレス帳はどこへやらと、すべてが携帯に取って代わられました。ふと人恋しくなった時アドレス帳を開いて、今日はどの人と話そうか、誰とお茶を飲もうかと考えることは幸せなことだと、当時、私の人生に老いのことなど全く視野に入っていなかったにもかかわらず、しみじみと心に残りました。

私にとって友は、人生に彩りを添えてくれるだけでなく、ひとりの暮らしにとっては最大の安全保障にもなり得ると、実感しているのです。その為には相手に期待するばかりではなく、相手からも魅力的だと思ってもらえるかどうかを考える必要があります。

お互いに凭れ合うことなくひとりを楽しむ。しかしまさかの時には助け合い、安心して迷惑をかけ合える。そんな人間関係を築きたいと願ってきましたが、果たしてどうか。改めて、自らの心に問うています。



(むらた さちこ) 立教大学英米文学科卒業後、NHKにアナウンサーとして入局。報道番組のリポーターや社会性のある硬派の番組を中心に担当。1990年、解説委員に就任。NHKスペシャル「あなたが寝たきりになった時」、NHKモーニングワイド「高齢化社会」のキャスター他、多くの番組を担当。2004年、解説委員を退任後も高齢者問題の第一人者として活躍中。現在、江戸川総合人生大学「介護・健康学科」学科長。

「地域助け合い基金」状況のご報告

皆様のご寄付により全国各地の助け合いを支援している「地域助け合い基金」。状況を報告いたします。

◎寄付受付額

182件 1010万6700円

このほかに当財団より6千万円を供出

◎助成実行額

368件 4864万9350円

(2月15日 当財団ホームページ開示時点)

おかげさまで、本基金へのご寄付が2月で1000万円を超えました。これも、本基金への共感と、コロナの影響による孤立、生活困窮が全国で大きな問題となっている今こそ、地域のつながり・助け合いを強力に進める時

であるという、皆様のお気持ちの表れであり、心より感謝申し上げます。

当財団では、今後も寄付者の皆様のお気持ちにしっかりと応えられますよう、できるだけ速やかに助成を進めてまいります。31ページからの助成先団体のご紹介もぜひご覧ください。引き続き、力強いご支援・ご寄付を何卒よろしくお願い申し上げます。

(事務局長・内田)



クレジットカード
決済ページ



財団ホームページ内
基金関連ページ

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。

●基金に関する情報、およびクレジットカード決済は、QRコードもご利用ください！

基金に関する
ご意見・お問い合わせ

＜地域助け合い基金担当＞

電話：(03) 5470-7751 FAX：(03) 5470-7755

メール：mail@sawayakazaidan.or.jp

昨年12月の朝日新聞に掲載された、当財団「地域助け合い基金」と日本の寄付文化に関する堀田力会長のインタビュー記事に、当財団個人会員の網野俊賢様よりお手紙が届きました。新聞記事と併せて紹介させていただきます。

(2020年12月20日付朝日新聞 堀田力記事「日本の寄付文化 花開くとき」より要約)

コロナ禍で、皆が人とのつながりを絶たれた生活の厳しさと不安とを感じたと思います。財団の「地域助け合い基金」には全国から助成申請があり、弱者に厳しい状況が起きていると痛感しています。

日本の寄付文化は「お付き合い寄付」が主流。欧米流は「こういう未来にしたい」という個人の生き方に根ざした寄付です。日本は今、お付き合い寄付からの転換期。「少額だから恥ずかしい」とする必要はありません。「自分は今、これだけ寄付をしたい」という気持ちがあれば、いくらでもいいのです。寄付は「活動を支援している」という熱い支援メッセージ。ボランティアも寄付も、人のためでもあるのですが、第一に自分のためです。「自分が社会の役に立っている」と感じられる精神的な満足感は得がたいもの。充実感を持って生きる一つの方法だと思って、生活を豊かにしていってもらいたいです。

「寄付は熱い支援のメッセージ」に同感です

網野 俊賢様より

先日、朝日新聞に堀田力さんの寄付についてのお話が載っていました。寄付はたとえ少額でも「活動を応援している」という熱い支援のメッセージになるとのお話、全く同感です。

かつてアメリカでボランティア活動に参加していたとき、アメリカ人から4つの「出す」があると聞かされました。「お金を出す」「顔を出す」「汗を出す（仕事する）」に加えて「血を出す」とのこと。ギョッとしましたが、「献血の場合だ」と言ってニヤリとしていました。

たとえささやかでも、自分がやれることをやるのが大事だと教えられた気がしました。少なくとも、3つの「出す」が揃って社会貢献が可能になると思いますが、「出す」の中から自分ができることをまずやってみるというのも大事かと思います。

コロナ禍にあって、貴財団のご活躍がますます大事になってまいります。よろしく願いいたします。

「地域助け合い基金」で コロナ禍を乗り越えて共生社会へ

皆様からのご寄付をお待ちしています！

1. 寄付金の使途

共生社会を推進するため、助け合い活動の支援に活用させていただきます。

助成の対象は、地域で暮らす人同士の助け合い活動であり、新たに団体を設立する場合のほか、新たに活動を広げる場合やコロナ禍に対応して特別な助け合い活動を行う場合も含みます。

高齢者、子ども、認知症、障がい、生活困窮の方々、刑余者、外国人、ケアラーの支援ほか、分野は問いません。ただし、日本国内の活動に限ります。

本基金は、支援したい市区町村（区は東京都の特別区）をご指定いただけます。

2. 税制上の優遇措置

当財団にいただいたご寄付は、税制上の優遇措置の対象となります（当財団発行の領収証が必要となります）。

3. ご寄付の方法

（1）銀行振込によるご寄付

三井住友銀行 浜松町支店（普通）口座番号 7859452

三菱UFJ銀行 浜松町支店（普通）口座番号 0095446

（口座名義 ※いずれも同様）

公益財団法人さわやか福祉財団 地域助け合い基金

※銀行お振り込みの場合は、送金者の情報がカタカナ表記のお名前のみとなるため、当財団発行の領収書が必要な場合や地域の指定をご希望の場合は、お手数ですが「寄付申込書」を当財団宛お送りください。当財団へのお電話でも承ります。

（2）郵便振替によるご寄付

（口座記号番号） 00110-7-709627

（加入者名） 公益財団法人さわやか福祉財団

※通信欄に、ご指定がある場合の市区町村名（区は東京都の特別区）と、ひと言応援コメントなどをご記入ください。※手数料不要の払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。

（3）クレジットカードによるご寄付

28ページのQRコードもしくは当財団ホームページよりお申し込み下さい。

助成応募については、当財団ホームページをご参照ください。

「寄付申込書」「パンフレット」なども、ホームページからダウンロードできます。

＜寄付・助成のお問い合わせ＞
地域助け合い基金担当

電話：(03)5470-7751 FAX：(03)5470-7755

メール：mail@sawayakazaidan.or.jp

応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、コロナ禍での困りごと、将来の地域共生社会実現のための取り組みを支援させていただいている「地域助け合い基金」。地域で助け合いを広げるためには、生活支援コーディネーター等と活動者がつながることも重要です。今月号では、そのような助成先をご紹介します。

神奈川県横浜市

コロナ禍で孤立する高齢者へ配食と見守り活動を広げるために地域の関係者とも連携

ねむのき会

助成金額 15万円

ねむのき会は、民生委員が中心になり一人暮らしの方、日中一人暮らしの方、高齢者世帯の必要とする方に、給配食を提供しており、給食ボランティア、定期訪問員が一緒に活動しています。他団体との連携においては、地域包

括支援センターの生活支援コーディネーターや横浜市戸塚区社会福祉協議会の生活支援コーディネーターも参加する中、地区社協理事会で、コロナ禍で活動再開するにはどうしたらよいか協議しました。昨年6月の第1回お弁当配布については、区社協が地域作業所とのコーディネートをし、本基金のこともこの理事会で情報提供され、とても大きな援助になったということです。

本基金の助成金で、高齢者のために6月は作業所に依頼、7月は配食、8月は食中毒への懸念から業者に発注を行ってお弁当を届けました。コロナ禍で不安いっぱいである高齢の方にいつものようにお弁当を届けて見守りを続け

たいとの思いから、民生委員6名と給食ボランティア5名が連絡を取り続けたことで、緊急事態宣言解除後の6月にはすぐに行動できたとのこと。

高齢者の方々に、「おいしかった」「外注もいいけど、いつものお弁当のほうがいいね」などと言っていただき、私たちの味が受け入れられていることをあらためて感じて、うれしい経験でした、と報告してくださいました。

活動を広げるために、今後も区社協、包括、町内会などと協力して活動していくことが大事だと考えている、ということです。

新潟県村上市

居場所、フードバンク活動を通じて みんなが役に立つ実感を

フードバンクさんぽく

助成金額 15万円

フードバンクさんぽくは、常に生活支援コーディネーターと連絡を取り合い、相談したり協力連携したりしながら、コロナの影響で生活困窮している主に一人親家庭への食料

品援助（フードバンク）

活動、さまざまな理由で留守番する子や一人暮らしのお年寄りの居場所づくり、異年代交流を行い、困りごとを共有して皆で解決しようと活動しています。

本基金の助成金は、近隣の空き家を活用し、家にこもりがちな子どもや高齢者などが気軽に立ち寄れる居場所をつくること、また、フードバンク活動を主として異年代交流の場をつくり、みんなが役に立つことを実感できる活動をしていきたいと、消費用品、空き家のカーテン、看板、電気料金、水道料金、灯油代等に活用されました。

フードバンクの活動として、昨年12月末現在33名の方に月1回食品を届け、徐々に増加もしているとのこと（延べ73件）。メディアに取り上げられたことで、支援を希望する人、支援したい人からも連日問い合わせがあり、必要の人に届き始めていること、フードバンクや困窮者支援への関心が高まっていることを実感しているそうです。



フードバンクに寄付された食品

フードバンクの利用者からは「この状況の中、気にかけてくださる方がいるんだと思ったら涙が出てしまいました。ありがとうございました」「子どもたちも喜んでました。私も頑張ります」といった声が寄せられたそうです。「居場所でフードバンク活動をすることで、地域の皆さんとの新しいつながりや深い交流が始まっています」との心温まる報告をいただきました。居場所が困りごと相談所のような役割を持てる可能性も感じており、今後も関係諸機関、地域の方々と協力をさらに強めて、持続可能かつ実現可能な方法を一緒に考えていきたい、とのことです。

熊本県菊池市

生活支援コーディネーターと連携し 地域の拠点として広がりを見せる

ひのくにスマイル食堂

助成金額 20万円

主宰者の自宅を開放して月1回、年齢・国籍等を問わず子ども・地域食堂を展開している、ひのくにスマイル食堂。地域おこし協力隊と協力して健康体操を行うほか、子ども

の学習支援の間に保護者がお茶を飲みながら子育ての悩みを相談するなど子育て世代のコミュニティ形成も進めています。

コロナ禍で収入が著しく低下、また家計への負担が増加した方々のために、本基金の助成金で昨年8～10月の間に4回、計400食のお弁当を配布しました。同食堂と常に連携している市役所子育て支援課・福祉課から地域包括支援センターの生活支援コーディネーターとコンタクトを取れるように調整してもらい、お弁当配布当日には、関係各所の方々も参加。連携を強化して、困りごとを聴取、スピディーに関係各所と情報共有を行って支援に入ることができたということです。子ども食堂を通じて地域へアプローチすることができると認識し、生活支援コーディネーターや民生・児童委員、社会福祉協議会など今後も連携を深めながら、地域の安心できる居場所、相談できる場所にも活用していくことで意見が一致しました。

行政関係者も、子ども食堂が一つの社会資源と認識し、行政と民間が手を取り合い、地域で孤立する人がないように視野を広げて支援できる体制が整いつつあり、今後は災害拠点としての役割もできないか模索中、ということでも発展的な報告を寄せてくださいました。



親子で "ちょいボラ" ♥ はなちゃん一家の発見

『親子で "ちょいボラ" ハンドブック』

このハンドブックは、地域での子ども
の子育てや親の子育てを応援するために、
親子でできるちょっとしたボランティア
＝「ちょいボラ」に取り組むヒントをま
とめている。

幼児期からの多様なふれあいの経験は
その後の人格形成に大変重要であり、ま
た、若い親にとっても、地域とつながる
ことで、大変な子育ての悩みを相談し、
助けてもらうこともできる。そのきっか
けとして、「親子で "ちょいボラ" をし
てみませんか?」と呼びかけている。

ハンドブックの特長の一つが、マンガ
とイラスト中心で構成されていること。
第1章は、主人公の鈴木さん/パパ、ママ、
はなちゃん（3歳）の一家が、"ちょい
ボラ"で社会参加して、地域の人たちと
ふれあい、学び、成長していく姿をマン
ガで描いている。親子で "ちょいボラ"
の活動例や活動の記録ページもあり、発
行元である認定NPO法人さわやか青少
年センターのホームページでも紹介予定
とのこと。また、同センターが行ってい
る「ふれあいボランティアパスポート」
とも連動し、社会貢献活動として寄付に
もつながる仕組みも紹介されている。学
齢期の子どものためのボランティア体験学
習を支援している同センター理事長の有

馬正史さんは「読書離れが進む若い親を
対象に、ボランティアを少しでも気軽に、
身近に捉えてもらえるように考えた。一
般に参考にしてもらうほか、幼稚園や保
育園、公民館、地域の居場所などに、親
子で "ちょいボラ" 学習会などを開催し
てもらい、テキストとして使ってもらい
たい」と語る。

購入・問い合わせは、同センター

電話 (03) 6279-9236

FAX (03) 6279-9256

<http://www.ssc-npo.or.jp/> まで



A5判72ページ

認定NPO法人さわやか青少年センター発行
800円 (税込・送料別)

新しい ふれあい社会づくりに 向けて

いきがい

ふれあい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。

特に現在は、全国自治体が新地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりを強力に支援しています。

どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

● 新地域支援事業・助け合いの地域づくり

北から南から 各地の動き

● その他の財団の活動 など

ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・

ご寄付者の皆様のご紹介

NEWS & にゅーす

さわやか活動日記(抄)

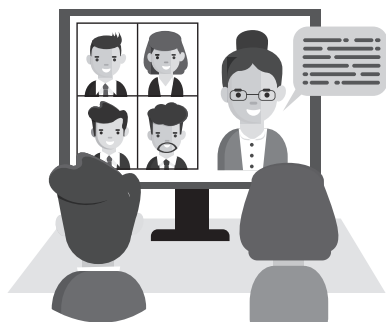




新地域支援事業・ 各地の動き

(2021年1月1日～31日)

- 全国各地で、
推進の支援をしています
- 活動の一部を紹介しています



住民に参加を呼びかける
(住民対象のフォーラム、勉強会等)

南アルプス市(山梨県)

19日/コロナ禍においても住民、行政等、皆で意識を共有しようとする市民フォーラムが開催され、当財団も協力。堀田力会長が講演、パネルのコーディネーターを務めた。

南アルプス市は、第1層生活支援コーディネーターの斉藤節子氏と第2層生活支援コーディネーターの小林陽一氏がしっかり連携し、2層16圏域の体制ができ、活動しているうちに「エリアが広すぎる」と自治会を単位とした3層の話し合いや助け合いづくりが50以上の圏域で進んでいる。斉藤氏は2015年から精力的に取り組んできており、助け合い活動を一時のブームに終わらせるのではなく、協議体の活動が地域に根付き、次の世代にもつなげていけるように、「安心して暮らせる地域づくりは夢物語ではない」と参加

者を感じてもらいたいと、このフォーラムを行政と共に企画。今後、活動をさらに拡充するため、住民にできること、行政にできること、また双方の連携の重要性をあらためて考える機会とした。

同市社会福祉協議会会長笹本彰氏の開会の言葉、金丸一元市長のあいさつに続き、厚生労働省老健局の平嶋由人氏から「令和3年度介護保険法改正のポイント」として講演。次に堀田会長が「今、なぜ支えあいの地域づくり?」として、住民の力の大切さやなぜ助け合いが必要なのかについて講演した。

パネルディスカッションでは、堀田会長のコーディネートにより、それぞれ特徴の違う2層圏域の協議体代表者が危機感を持ち意欲的に取り組んできたことで、必要と感じる行政との連携や助け合いづくりのプロセス、また、楽しいと感じたこと、課題等について話した。これに、市の福祉部長も自治会との連携という課題を挙げながらも

積極的に支援する姿勢を示した。

終了後アンケートでは、参加190名中106名の住民が活動を始めたいと回答し、「皆の責任（今の日本の現状）だから、皆で支えるしかないという考え方に深く共感した」「行動を後押ししていただいた」など、助け合いに積極的に向き合うコメントも多数寄せられた。住民を含めた関係者が皆で原点を再確認し、理解を広げて意識を醸成していく場になった。

（鶴山・川田）

生活支援コーディネーター・協議体と連携

軽米町（岩手県）

25日／軽米町の第1層協議体「結つの会」のオンライン勉強会が行われ、第1層生活支援コーディネーターと協議体、第2層生活支援コーディネーター、行政担当者が出席、当財団も県のアドバイザーとして出席した。生活支援コーディネーター、協議体として具

体的な取り組みにつなげることが目的。

結つの会は、生活支援コーディネーターと毎月定期的に会議を開催しながら、2層3圏域ごとの体制づくり等を進めてきたが、コロナもあり中断。そんな中、11月に市民フォーラムを、12月にフォーラム参加者を対象とした座談会を開催し、コロナ禍による活動中断で下がりかけていたモチベーションも再びアップしてきている。

これまでの取り組みから今後に向けて、有償ボランティアといつでも誰でも型居場所の仕組みと意義を事例と共に紹介した。結つの会の仕掛けから助け合いの芽が始めていることを共有し、生活支援コーディネーターと共に情報提供して育てていく動きを始めるときだと伝えた。この勉強会を受けて、2月には第1層・第2層の生活支援コーディネーターと協議体が集まり、実践活動に向けて話し合う予定。

（鶴山）

洋野町（岩手県）

21日／岩手県のアドバイザー派遣事業として、洋野町の第1層生活支援コーディネーターの澤由紀子氏、第2層生活支援コーディネーターの高屋敷恵氏、同町社協の村上由希子氏、NPO法人エンパワメント輝きの大光テイチ氏と当財団がオンラインで2回目の勉強会を実施した。

同町の地区でのワークショップ実施の取り組みについて報告を受け、「除雪支援の必要な地域では生活支援等の仕組みも必要性があったのではないかと」と有償ボランティアの事例と共に情報提供した。同町は自治会単位での話し合いを始めているが、その活動を進めながら2層2圏域で勉強会等を行い、理解者を増やして2層づくりを進めていくことを提案した。2層でしっかり住民の声を聞き働きかけるために、体制も充実していく予定。参加者から「手を挙げてくれた人の火を消さないように間を置かず働きかける」と

の決意が聞かれた。これからに期待したい。

(鶴山)

吉川市(埼玉県)

13日／吉川市の第1層生活支援コーディネーターに、オンラインで当財団から相談支援を行った。

保育園を活用した居場所づくりの提案があるとのこと。財団から、第1層協議体で第2層の活動立ち上げをどう支援していくかについて話し合うことを提案した。第1層協議体には保育園が該当する圏域の包括職員も参加しており、保育園主催者にオブザーバーとして参加してもらい、コロナ禍後の居場所づくりのあり方を検討することを勧めた。財団も、コロナ禍における他市町村の事例紹介や、勉強会の講師等の支援はできることを話した。オンラインによる相談も含めて今後も支援を続けたい。

(岡野)

板橋区(東京都)

25日／板橋区の生活支援体制整備事業に係る「支え合い会議オンライン交流

会」に当財団も協力した。まず、区内全18圏域の第2層協議体の取り組み状況を全体で共有。その後、複数のグループに分かれ、参加した構成員が意見交換を行う時間を設けた。当日は大きなトラブルもなく住民である構成員からは主体性を感じる前向きな意見が多く出され、積極的に意見交換に参加する姿が印象的だった。

オンラインでの会議はすでに一般的になりつつあるとはいえ、それでも今回のような数十人規模の運営は簡単ではない。こうした成功の裏には、それだけの工夫と努力がある。主催した同区社協は、事前にオンラインソフトの使い方の資料や、意見交換のためのワークシート等を準備して周知対応している。コロナ禍でも、本事業の推進に向けて新たな手法に挑む同区の取り組みには、学ばべき要素が多い。引き続き、関係者が足並みを揃えながら地域の住民主体で進める助け合い創出の展開に期待がかかる。

(長瀬)

郡上市(岐阜県)

27日／郡上市で生活支援体制整備事業関係者会議が行われ、当財団が岐阜県のアドバイザー派遣事業で対応した。同市では、17年から第2層協議体について地区社協をベースに編成して取り組んでいる。

この日は、これまでの経緯と現状を確認し、全国の事例など情報提供とともに、参加した関係者との意見交換を行った。同市は今回協議した内容を踏まえた関係者会議を行う予定で、財団も引き続き来年度の計画検討などに協力する。

(長瀬)

新潟市(新潟県)

28日／新潟市の第2層生活支援コーディネーターをメイン対象とした研修会が開催され、当財団の堀田力会長が講演した。2014年から前倒しで事業に取り組んできた同市が、25年に向けて原点を確認し、さらにこの先の共生社会に向けた多様な連携を共有しながら推進していくことを目的とした。第

1層や区役所、市役所、第2層の所属法人等も参加して学び合った。

講演は「共生社会構築に向けた推進員の役割について」とし、全体を2部構成とした。前半は「地域包括ケアに向けての生活支援助け合いの基本的な役割」と題し堀田会長が講演。その後、「地域包括ケアに向けて生活支援の助け合いは具体的にどのように進んでいるか」として、新潟市の支え合いのしくみづくりアドバイザー河田珪子氏が具体的な取り組みを紹介。「有償の助け合い『お互いさま新潟』をしっかりと根付かせ、面として助け合いを広げたい」とコメントした。

後半は「共生社会への動きと役割の拡大」とし、地域包括ケアから地域共生社会・地域づくりへと広がる動きと、そのとき生活支援コーディネーターらがどんな役割を果たすのかについて堀田会長が講演。また、21年4月から始まる社会福祉法改正の新制度に触れ、「地域共生元年」とし「高齢、障がい、

子ども、生活困窮など財源も含めて一緒にやれるように、共生のプラットフォームをつくっていく」と提案、「住民が主体でなければ実現できない」と話した。さらに「具体的にどんなことに関心を持ち、心構えをして進めていけばよいのか」について河田さんとクロストーク。「新しいことをするのはなく、視野を広げる。生活支援コーディネーターと協議体がリードしながら、あったかい地域を目指してモデルをつくっていく」と共有した。その後、第1層生活支援コーディネーター18名がリードして、グループワークで課題や今後やるべきことなどについて話し合い共有した。

この研修を受けて、新潟市は40年に向けて共生社会への視野を広げながらエンジンをつかした推進が始まると思われる。

(鶴山)

富山市(富山県)

25日／富山市内の地区社協役員、包括担当職員等を対象に「地域助け合い住

民福祉活動 通いの場・居場所づくり研修会」が、同市・同市社協の主催で開催され、当財団も協力。コロナ禍の影響により、今回、財団はリモートでの出席となった。居場所の現状と新たな取り組みの紹介に加え、居場所から生まれる助け合いについても説明、質疑応答も行った。今後は地区社協を中心に、生活支援コーディネーターと連携しながら小地域単位での居場所の立ち上げに取り組んでいく予定。

(高橋)

敦賀市(福井県)

19日／敦賀市内に配置されている第1層・第2層生活支援コーディネーターを対象に、同市主催で「生活支援体制整備事業オンライン研修会」が開催され、当財団も協力。市庁舎に集まった生活支援コーディネーターと財団をネットワーク接続し、事前に送付された状況報告書、課題・質問シートも活用しながら、コロナ禍での具体的な取り組みや今後の展開等について、情報提



供と意見交換を行った。

(高橋)

生活支援コーディネーター 養成研修等に協力

群馬県

12日／群馬県西部ブロックの生活支援コーディネーター連絡会が開催され、当財団も協力。本企画は、県庁と共に県レベルのバックアップの取り組みとして定期的に実施されている。今回は住民主体の助け合い創出に向け、地元企業との連携について協議を行った。

これまでの集合型をオンラインに切り替えての開催だったが、積極的な意見交換が行われ、参加した関係者のネットワーク力を活かし、意見交換に協力可能な企業の確認等を行った。

(長瀬)

岐阜県

22・28日／岐阜県の生活支援コーディネーター資質向上研修会が開催され、当財団が協力。当初、集合型で企画していたブロック研修等が開催できな

ったため、本企画はそれらの要素を含めつつ、オンラインでの実施となった。事前にアンケートを実施し、その回答結果に合わせ、現状の課題や質問に対する説明を行った。

この構成は他県で実施した県レベル研修と共通点を持たせており、参加者の回答から全国的な傾向を掴むこともできた。その結果を踏まえ、今後の県レベルのバックアップのあり方について同県と研修後に協議を実施。生活支援コーディネーターの情報共有の場や、共生社会の実現など他制度との関係性の理解等、本事業の継続的な推進の必要性を確認した。

(長瀬)

(本稿は、岡野貴代、川田利輝、高橋望、鶴山芳子、長瀬純治)

さあ、言おう

2020年
8月特別号

特別対談

宮本太郎・堀田力

青写真を描くのは地方自治体

～地域共生社会への道と課題～

当財団会長・堀田力が中央大学法学部教授・宮本太郎氏をお招きして、今後の日本における地域共生社会について話し合いました。今後の共生社会づくりに、どうぞご活用ください！

主な内容

- ◆選ぶ道は地域共生社会
- ◆地域共生社会への道筋と大きな課題



◎お問い合わせは広報まで 電話：(03) 5470-7751 メール：pr@sawayakazaidan.or.jp

ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

(敬称略) (2021年1月1日～1月31日財団受付分) ※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合がありますご了承ください。

さわやかパートナー個人(79件)

(都道府県別50音順)

宮城県	角田 修一	鈴木 章雄	佐藤 京子	有賀 満雄	静岡県
氏家 郁郎	埼玉県	鈴木 美智子	下畑 穰治	大澤 哲夫	石津 道弘
鈴木 進	新井 章子	平 雅久	杉野 隆宣	川原田 武	大内 愛子
山形県	中神 正義	館 里枝	鈴木 宏量	小山 俊司	黒田 欽子
高橋 寛人	中神 吉且	滑川 里美	鈴木 広幸	白井 哲三郎	原 章
福島県	千葉県	原 幸雄	ソエタ シゲミ	高松 清美	愛知県
佐藤 俊子	赤松 鐵雄	藤本 裕一郎	玉木 康平	中川 敬士	中山 隆雄
ツノダ ユミコ	阿部 美佐子	松原 尚明	鳥飼 重和	中野 曹一	松井 正宏
茨城県	川口 清	三上 彬	中井 郁子	平井 昌利	京都府
池ノ上 和夫	北田 仁則	東京都	肥口 ふみ枝	森 和	小田 和夫
栃木県	小林 雅彦	石川 みのり	升田 忠昭	新潟県	小田 幸子
菅野 安子	坐古 桂一	木下 清	松下 明夫	須田 貴子	兵庫県
群馬県	笹嶋 貢	櫻井 郁利	丸山 哲史	石川県	大森 みのり
恩田 初男	重田 百合子	佐生 綾子	柳 久美子	安嶋 是晴	奈良県
			山谷 恵美子	岐阜県	オクタニ カユリ
			吉田 信正	河合 峯	和歌山県
			神奈川県		田中 衣子

さわやかパートナー法人(4件)

(50音順)

株式会社青山製作所
日本電気株式会社
株式会社ニフコ
ポッカサッポロフード&ビバレッジ株式会社

一般ご寄付(4件)

(50音順)

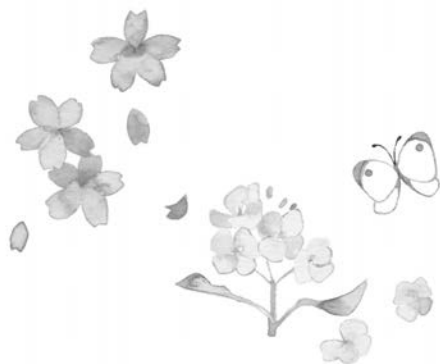
高橋 愛子(2万円)
中野 曹一(2千円)

保坂 敦子 (10万円)
松原 彰雄 (1万円)

地域助け合い基金で寄付 (4件)

(ご寄付日付順)

匿名希望 (5万円)
NPO法人さわやか埼かつ (18万7500円)
株式会社サンセット・シニアーズ (20万円)
匿名希望 (10万円)



『さあ、言おう』バックナンバーのご紹介



2021年2月号

- 巻頭言 「将来を見据えて、今、助け合いの土台づくりを」 清水 肇子
- 新連載・今風女子 (聞き手・堀田力)
「真っ直ぐな思い、いくつになっても好奇心」 鮫島 純子さん
- 活動の現場から 地域の応援隊 和 (高知県津野町)
- 移住 悪くないですよ
移住で一番大事なこと 人々と共にある生活 (埼玉県長瀬町)
- 新連載1 老いの暮らしを創る 「子育て期より長い高齢期」 村田 幸子



2021年1月号

- 新春巻頭言 「コロナ禍を乗り越えて共生社会を創ろう」 清水 肇子
- 新連載・厨房男子 (聞き手・堀田力) 「みそ汁の味」 丹 直秀さん
- 特別寄稿 「善意の受け皿」 弁護士 清水 勇男
- 移住 悪くないですよ 本当の豊かさとは (長崎県対馬市)
- 活動の現場から 認定NPO法人ハーモニーネット未来 (岡山県笠岡市)



2020年12月号

- 巻頭言 「国に緊急提言を行いました」 清水 肇子
- 新連載 移住 悪くないですよ
寒いけれどあたたかい、枝幸町の応援団長 (北海道枝幸町)
- 活動の現場から 東灘子どもカフェ (兵庫県神戸市)
- 看取り・終末期を考える 裏を見せ、表を見せて… (最終回)
「『死』を想うきっかけとなった 新型コロナウイルスの襲来」 尾崎 雄

その他の内容 新地域支援事業・各地の動き／「地域助け合い基金」状況のご報告／「地域助け合い基金」助成先紹介／新・ひとりごと ほか

◆ お問い合わせは広報まで 電話 (03) 5470-7751

NEWS

& にゅーす



2020 (令和2) 年度

「連合・愛のキャンパ」 支援先が決まりました

立ち上げ支援プロジェクト

今年度も、日本労働組合総連合会（連合）より組合員の方々のキャンパを提供いただき、地域での助け合い活動立ち上げや新規事業立ち上げを支援しました。

募集期間は昨年10月半ば～11月末と

し、例年同様、全国の社会福祉協議会やNPOセンター等からも周知のご協力をいただいた結果、30都道府県91団体から応募をいただきました。コロナ禍ということもあり、一人親家庭などの子ども支援や生活困窮者支援、障がい者支援の団体からの応募が目立ちました。結果、下記の通り17団体に計251万円を助成いたしました。資金を提供していただきました連合組合員の皆様に、心より感謝申し上げます。

現在、全国的生活支援コーディネートーターが有償ボランティアによる生活支援の立ち上げや居場所づくりなど、地域のニーズに応じた

2020 (令和2) 年度「連合・愛のキャンパ」助成17団体

- あったか訪問隊（宮城県大崎市）
- 「lets にしごう」（福島県西郷村）
- NPO法人
あそび発達サポート研究所（千葉県成田市）
- NPO法人
ハイティーンズサポートちば（千葉県船橋市）
- 一般社団法人 こみゆと小平（東京都小平市）
- 「お互いさまサロン」 日の出（東京都武蔵村山市）
- 南翼サロンの会（愛知県知多市）
- いなべ子育てネットワーク
いなこね（三重県いなべ市）
- 国府地区まちづくり協議会
国府地区生活支援 ネット（三重県鈴鹿市）
- 別保未来推進部生活支援グループ（新潟県柏崎市）
- 子ども食堂COCO（滋賀県栗東市）
- 喫茶ランチルーム（京都府京丹波町）
- わくわく会（大阪府岬町）
- 松山さかのうえ日本語学校（愛媛県松山市）
- NPO法人
飯倉・あったか支援隊（福岡県福岡市）
- どの子も凸凹プロジェクト
実行委員会（福岡県福津市）
- 福田子ども食堂（長崎県長崎市）

立ち上げの動きを始めています。今後はそのような支援につながっていくことにも期待したいと思います。
(鶴山 芳子)

都道府県別 応募と助成状況

都道府県名	応募	助成
岩手	1	
宮城	4	1
福島	3	1
栃木	1	
群馬	2	
埼玉	1	
千葉	3	2
東京	13	2
神奈川	3	
長野	1	
愛知	4	1
三重	4	2
富山	3	
新潟	2	1
滋賀	2	1
京都	8	1
和歌山	4	
奈良	1	
大阪	4	1
兵庫	7	
山口	1	
愛媛	4	1
香川	2	
高知	1	
福岡	5	2
佐賀	1	
大分	1	
長崎	1	1
宮崎	2	
沖縄	2	
合 計	91	17

● 30 都道府県 91 団体の応募 ● 助成団体 13 都道府県 17 団体

さわやか活動日記(抄)

〈2021年1月1日～1月31日〉

社会参加推進事業

社会人地域参加推進プロジェクト

高連協役員会 開催

【1月25日】

高齢社会N・G・O連携

協議会（高連協）の役員会をウェブ会議形式で開催。NPO法人高齢社会をよくする女性の会理事長樋口恵子氏と当財団会長堀田力の両共同代表参加の下、理事8名および事務局

の計11名が参加した（欠席者3名はいずれも委任状を提出）。

来る3月30日開催の総会に向けて、①20年度会員状況及び決算見込み、②21年度事業計画について、③21年度予算計画について、④21年度年間スケジュールについて、⑤総会運営について、の5議題について協議した。結果、21年度事業計画は、政策提言事業として、

①「高齢女性の雇用を含めた社会参加」について研究提言する事業、②「助け合いによる社会参加」について研究提言する事業、③「厳しい社会情勢（財政・人材）の状況を見据えた上での高齢者の身体的な支援ケアをどう持続維持していくか」を研究提言する事業、の3つの事業を推進することとし、手上げ事業としての①「超齢社会

における社会教育」（公益財団法人社会教育協会）、②「企業OBに地域社会の助け合い活動への参加をうながすための事業」へいきがい・助け合いサミットin神奈川（当財団）Vの2事業とともに総会に諮ることとした。また、総会はコロナ禍対応によりウェブ会議形式で開催することとした。
(玉置)



調査政策提言
プロジェクト

子どもの共感力を
育てる検討委員会

第1回委員会を開催

〔1月18日〕

当財団では、未就学児の頃から、体を使った遊びなどで高齢者らとつながる機会を各地域でつくることにより、子どもの共感力を育てていくことを目的として、子どもと高齢者のスポーツや遊びによる世代間交流促進事業を開始、地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター研究所に委託して進めている。

1月18日に第1回検

討委員会が開催され、委員として大学教授な

どの研究者と施設や地域での実践者が参加した。当財団の堀田力会長から主旨説明があり、清水肇子理事長の進行により、委員それぞれの立場で「子どもの共感力を育てるには何が必要か。そのために何ができるか」について

協議し、共通認識を得ることができた。この検討委員会は全4回を予定しており、さらに議論を進めていく。今後は実践ガイドを作成し、地域への働きかけ

につなげたい。また、来年の「いきがい・助け合いサミット in 東京」での提言にもつなげる予定。（目崎康）

事務所
だより

●今年度の研修生もあと数週間で研修が終わる。今年度は在宅勤務などでなかなか会うことができず交流が難しい面もあったが、ぜひ元の職場に戻ったら、ここでの研修の成果を有効活用してほしいな。もちろん、神奈川サミットも応援してね！

新職員紹介

神奈川サミットで
お待ちしております

徳間 康晋
とくま やすゆき

縁あって、財団事務局で皆様とご一緒させていただくことになりました。財団の理念である「新しいふれあい社会の創造」の実現に向けて、常に創意工夫を心がけて取り組んでいきたいと思いますので、今後ともよろしくお願いいたします。

今年は「いきがい・助け合いサミット in 神奈川」も予定されております。まだコロナ禍で心休まらない日々が続きますが、現場で元気に直接皆様にお会いできるのを楽しみにしております。

みんなの広場



投稿募集

『さあ、言おう』は、皆様の声を社会につなげる問題提起型情報誌です。ぜひ、皆様の声をお寄せください。

本誌で取り上げたテーマへのご意見・ご感想、人生100年時代の生き方、ボランティア活動等のエピソードなどをお待ちしています！

- *添付の投稿ハガキや投稿用箋などをどうぞ活用ください。
- *掲載にあたっては、誌面の都合により編集要約させていただく場合がありますので、あらかじめご了承ください。

送付先

〒105-0011

東京都港区芝公園2-6-8

日本女子会館7階

公益財団法人さわやか福祉財団

『さあ、言おう』編集部宛

FAX: (03) 5470-7755

メール: pr@sawayakazaidan.or.jp

『さあ、言おう』をいつも面白く読んでいます。1月号は「厨房男子」が特に面白かったので、私としては初めてのことなのですが、読者からのご連絡を差し上げる次第です。まず、「聞き手」の堀田力さんが

堀田さん、丹さん、
コロナ禍後に……！
大塚 正民さん
東京都



終れば密に飲みましょう！

私の司法修習生時代の友人です。そして、「話し手」の丹直秀さんは私の大学時代の同級生です。
堀田さんが「ご同輩、丹さんの言葉を信じましょう」と言っておられるように、丹さんの言葉は、現在の私には「神様の言葉」のように思われます。コロナ禍が終息したら、真っ先にお二方にお会いしたいと思っています。



Tsutomu Hotta

生活支援を目的とする 市民後見NPOを増やそう！

市民後見NPOに 助成します

特定非営利活動法人

高齢者・障害者安心サポートネット

理事長 森山 彰

法人総務部 電話 092-737-2345

団体ホームページ <http://anshin-net.jp/>

2004年、当法人は成年後見制度の活性化を目的として創立、「個人の尊厳の保持と自立の支援という福祉の根本理念」を活動指針とし、独立採算制でスタートしましたが、直後はNPO共通の資金難に苦しみました。そこで、助成金公募団体を探して応募。その結果2年連続で100万円ずつ計200万円の助成金を獲得、それを資金に2年連続で「市民後見人育成研修」を実施することができました。お陰様で、この研修の目玉として、2回ともさわやか福祉財団堀田会長（当時理事長）に特別講演を依頼、講演は大盛況。堀田会長は、ユーモアを交えて、「ボランティアが旺盛な市民後見人が中心の**市民後見NPO**を沢山つくろう！」という話をされ、聴衆は深い感銘を受けました。この研修がきっかけで、当法人は地域の信頼を得て、後見人の受託数も増加、財政基盤も安定し、熊本市で後見NPOを、また、福岡市で生活支援事業のNPOを立ち上げるまでになりました。

ところが、現在でも共生社会で重要な役割を担う市民後見人は、十分に育っていません。その原因は、育成・活動を支援する市民後見NPOの数が圧倒的に少ないことにあります。設立したけれど、資金面で安定せず、挫折しているからです。本来この支援は国や自治体の責務ですが、動きが鈍いのが現状です。

そこで、当法人の「安心サポートネット基金」から、創立時の恩返しの意味を含め、1法人200万円を限度に、10法人に達するまで市民後見NPOの創業時費用を助成する事業を、ちっぽけですが開始しました。

市民後見NPOを目指して苦勞している団体やNPOに対して、本助成金公募について読者の皆さんからご案内願えばありがたいと思います。

助成金応募要領は上記の当法人ホームページに掲載、法人総務部が問い合わせに対応します。

私たちはふれあいあふれた地域づくりを支援しています

さわやか福祉財団の活動をぜひご支援ください。

『さぁ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さぁ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人
年会費

法人
年会費
(1口)

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の控除対象となります。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の控除対象となります（所得税の寄付控除額の上限は所得の40%－2000円）。

一般ご寄付を
いただく場合の
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856※

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

※手数料不要の専用用紙をご用意していますのでお申し出いただければご郵送します。

*いずれもお問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。(mail@sawayakazaidan.or.jp)

表紙絵

はり絵・池田げんえい



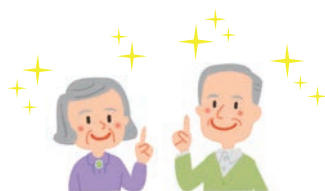
「早春符」

編集後記 ●「厨房男子」第2回は、NEXT 動画・第6弾の「ふらっとカフェ鎌倉」で料理の腕を振るう中根敏雄さんです（P4～）。●「活動の現場から」は神奈川県南足柄市。防災をキーワードに集結した地元の団体を中心に生活支援の仕組みを創出しました（P12～）。●「移住 悪くないですよ」第4回は、集落の住民であり公務員でもある富山県氷見市の伊東翼さん。薪ストーブで実感する幸せのお話が印象的でした（P20～）。●「地域助け合い基金」へのご寄付が1000万円を超えました。今後ともご支援をよろしく願います（P28）。

助け合いを
広げよう!

新
ひとりごと

大島 伸一



● 国立長寿医療研究センター名誉総長

もともとは泌尿器科の外科医です。著書に『超高齢社会の医療のかたち、国のかたち』（グリーン・プレス）、『老後を生き抜く方法』（宝島社）、『長寿の国を診る』（風媒社）など。

超高齢社会を世界に先駆けて構築した日本が

どんな社会になるのか、

世界中が注目している中でコロナ禍です。

高齢者を孤立化、虚弱化させないための基本原則が、

三密によって否定され、行き場を失いました。

さあ、どうするか。

これからが知恵の出しどころです。

たのしみ 3月号

通巻331号 2021年3月10日発行
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい
イラスト すずきひさこ
福島康子

レイアウト 菊池ゆかり

印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子
発行元 公益財団法人さわか福祉財団
〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp
<https://www.sawayakazaidan.or.jp>
Printed in Japan

無断複写・無断転載はご遠慮ください©

地域共生社会に向け、最前線の課題と対応策を共に考えるチャンス

いきがい・助け合い サミット in 神奈川

「地域共生社会」に向けて地域包括ケアや新地域支援事業はどうあるべきかなど、幅広いテーマについて、大阪サミットでの議論をさらに深めます。

**コロナ禍を乗り越えて、
地域共生社会実現に向け、一緒に前に進みましょう！**

開催 2021年 **9月1日(水)・2日(木)**

場所 パシフィコ横浜 (横浜市西区みなとみらい1-1-1)

開催形式 会場参加、ライブ配信併用

会場参加 **1500名** オンライン視聴 **3500名**

※新型コロナウイルス感染症の状況により、全面オンライン配信とする場合があります。

お申し込みの
ご準備を
お願いいたします

● 全体シンポジウムテーマ **幸せな人生と社会に不可欠ないきがいと助け合い**

<登壇者>

東京大学高齢社会総合研究機構・未来ビジョン研究センター客員研究員 辻 哲夫氏

東京大学名誉教授 神野 直彦氏

総合研究大学院大学学長 長谷川 真理子氏

津田塾大学総合政策学部客員教授 村木 厚子氏

<進行役>

公益財団法人さわやか福祉財団会長 堀田 力

お申し込み受付開始は5月中旬を予定

※お申し込みには、資料代として
お一人2,000円をいただきます。

主な内容

- 全体シンポジウム
- 分科会：第1部から第3部まで35分科会
- ポスターセッション
- 全体発表会 など

※現時点での予定です

お問い合わせ：電話 (03) 5470-7751 (担当・内田)

◎開催情報は、財団ホームページでもご案内します ▶ <https://www.sawayakazaidan.or.jp>

3月22日の2020年度さわやか福祉財団全国交流フォーラムは、中止いたします。
何卒ご了承ください。